

2018年9月の金融経済概況のポイント

■景気の基調判断

- 9月は、「道北地域の景気は、基調としては緩やかに持ち直しているものの、北海道胆振東部地震の影響による下押し圧力がみられている」と、判断をやや引き下げました。8月までは概ね基調に変化はありませんでしたが、地震の影響による下押し圧力が9月以降、観光や消費等に窺われています。
- 公共投資は災害復旧工事の一巡から減少しており、個人消費も冴えない動きが続いています。9月はさらに、地震後の停電や物流の停滞も下押し圧力として作用したようです。観光も8月までは持ち直していましたが、地震発生以降は風評被害による入込み客数の減少などがみられます。
- もっとも、建設関連では、引き続き繁忙な状態が続いています。雇用面でも、労働需給は引き締まっており、金融機関の貸出も前年より増加しています。
- これらを総合的にみると、道北地域の景気は、引き続き持ち直しのフェーズにはあると思われますが、地震の影響による景気下押し圧力については、それが一時的なものにとどまるかどうかなど、今後の動向を注視する必要があります。

■個人消費の動向

- 大型店売上高は、7月、8月とも前年を下回りました。8月まで12か月連続のマイナスです。7月（昨年11日→本年10日）、8月（昨年9日→本年8日）とも、今年は土日祝日の数が昨年に比べて少なかった面も影響していると思われますが、弱い状況が続いていると判断しています。
- 新車登録台数も、7月、8月ともに前年割れでした。8月まで8か月連続の

マイナスです。モデルチェンジ車を中心に堅調な伸びを示した昨年の反動といった要因も働いているものと思われます。

■観光の動向

- 夏のハイシーズンを迎えた観光は、7月、8月で一部に前年を下回るデータも出ていますが、昨年が総じてますますの状況であったことを考えると、8月までは持ち直していたと判断できます。
- 道北4空港（旭川、稚内、女満別、紋別）の旅客数をみると、7月は旭川、女満別、紋別の3空港で前年を下回り、15か月振りに前年を下回りました。ウェイトの大きい旭川空港は、国内線の前年比マイナスに国際線の定期便数減少等によるマイナスも加わって、やや大きめの前年比マイナスとなりました。8月は、国内線で女満別空港や紋別空港が前年を上回ったほか、旭川空港の国際線も国際チャーター便の増加から前年を上回り、全体でもほぼ前年並みに戻しました。
- ホテル・旅館宿泊者数は、7月、8月ともに小幅ながら前年を下回りました。旭川市内のホテル客室稼働率もそれぞれ前年を下回りましたが、それでも高稼働を続けており、かなり繁忙な状況でした。宿泊日を前にした値下げ販売を行わずとも、旺盛な需要から結局客室が埋まったなど、観光客を中心に客室単価も上昇したとの声も聞こえています。
- 各地観光施設の入込みは、7月の利尻礼文フェリー、網走監獄、8月の網走監獄を除いて、各施設とも前年を下回ったため、全体でも、両月とも前年を下回りました。ただ、今年の7、8月は前年より土日祝祭日が少なかったこと、また、同様に今年の7、8月は前年より降水日数が多かったことなどを勘案すれば、持ち直しの判断を変更するには至らないと思われます。
- もっとも、地震の発生以降、風評被害による団体客のキャンセルなど、観光客の入込みが減少しているとの話が聞かれています。

■公共投資の動向

- 上川、宗谷、オホーツクの3総合振興局における公共工事請負金額は、7月が前年を2割程度下回り、8月も1割弱下回りました。年度初来4~8月の累計でも、宗谷は前年を上回っていますが、上川、オホーツクは前年を下回っており、全体でも前年実績を1~2割方下回っています。昨年度前半に集中した災害復旧工事の発注一巡から、発注が減少しています。
- ただし、建設業者の手持ち工事量は多く、働き方改革に合わせて対応を模索する中、人手不足を訴える声も強く、繁忙な状態が続いているようです。

■住宅着工

- 新設住宅着工戸数は、持家が6、7月と前年を上回り3か月連続の前年比増加となりましたが、貸家が両月とも前年比大幅減となったことを受けて、全体でも6、7月と前年を下回り、7月まで3か月連続の前年比減少となりました。

■住宅以外の建築物

- 建築物着工床面積（非居住用）は、前年4月、5月の大幅増加の反動から、本年4月、5月が大幅前年割れとなった後、6月も前年比で6割方の大幅減少となりましたが、7月は前年比減少幅を縮めました。

■農業

- 農業は、上川、オホーツクとも、9月上旬までの低温・多雨・日照不足の影響により、水稻、小豆（以上、両地区）、菜豆（オホーツク）などの生育に遅れないし停滞が見られています。一方、収穫期となった馬鈴薯や玉ねぎは平年並みに作業が進みました。
- この間、生乳出荷量については、7、8月とも前年を上回って推移していましたが、地震発生後はその影響が及んでいるようです。

■雇用

- 雇用状況は、引き締まっています。6月、7月の有効求人倍率は、旭川、北見、稚内、網走のいずれにおいても1倍を超え、全体でも両月とも前年同月を上回りました。昨年6月以降、14か月連続の1倍超えとなっています。新規求人数も、6月は北見を除く3地区で、7月は北見、網走を除く2地区で前年を上回り、全体でも6月、7月と前年同月を上回って、7月まで6か月連続で前年を上回っています。

■今後のポイント

- 8月までの道北の景気は、6月までと比べて大きな変化はありませんでした。すなわち、全国の景気拡大の動きほどの勢いはありませんが、「緩やかな持ち直し」の局面が続き、目に見えてよくなっているという実感はあまりないかもしれませんが、繁忙感を募らせている企業も多く、道北企業の景況感は総じてみれば、ますますの状況であったと思われます。公共工事の発注が減少している建設業界でも、手持ちの工事はまだ多い様子で、観光も8月までは順調でした。
- 一方、9月の北海道胆振東部地震の影響に関しては、道北地区では直接的な地震の被害は多くは見られなかったものの、その後の停電や交通・物流の停滞の影響が観光、消費等のほか、市民生活にも及びました。
- 今後は、①北海道胆振東部地震の影響が、消費マインドの慎重化による個人消費の下押しや、風評被害による観光産業へのダメージにつながらないか、それが長引かないかといった点には、注意を要します。また、引き続き、②建設業者が良好な景況感を持続するのに十分な工事量を維持できるか、③建築物を含めた民間の設備投資動向が活発化するかといった点にも、目を配る必要があります。

以 上